

[B年] 公現後第1主日(2023年1月8日)

【旧約聖書日課】ヨシュア記 3章1～17節

¹ヨシュアは、朝早く起き、イスラエルの人々すべてと共にシティムを出発し、ヨルダン川の岸に着いたが、川を渡る前に、そこで野営した。²三日たってから、民の役人は宿営の中を巡り、³民に命じた。

「あなたたちは、あなたたちの神、主の契約の箱をレビ人の祭司たちが担ぐのを見たなら、今いる所をたつて、その後につけ。⁴契約の箱との間には約二千アムマの距離をとり、それ以上近寄ってはならない。そうすれば、これまで一度も通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道は分かる。」

⁵ヨシュアは民に言った。

「自分自身を聖別せよ。主は明日、あなたたちの中に驚くべきことを行われる。」

⁶ヨシュアが祭司たちに、「契約の箱を担ぎ、民の先に立って、川を渡れ」と命じると、彼らは契約の箱を担ぎ、民の先に立って進んだ。

⁷主はヨシュアに言われた。

「今日から、全イスラエルの見ている前であなたを大いなる者にする。そして、わたしがモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、すべての者に知らせる。⁸あなたは、契約の箱を担ぐ祭司たちに、ヨルダン川の水際に着いたら、ヨルダン川の中に立ち止まれと命じなさい。」

⁹ヨシュアはイスラエルの人々に、「ここに来て、あなたたちの神、主の言葉を聞け」と命じ、¹⁰こう言った。「生ける神があなたたちの間におられて、カナン人、ヘト人、ヒビ人、ベリジ人、ギルガシ人、アモリ人、エブス人をあなたたちの前から完全に追い払ってくださることは、次のことで分かる。¹¹見よ、全地の主の契約の箱があなたたちの先に立ってヨルダン川を渡って行く。¹²今、イスラエルの各部族から一人ずつ、計十二人を選び出せ。¹³全地の主である主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、川上から流れてくる水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つであろう。」

¹⁴ヨルダン川を渡るため、民が天幕を後にしたとき、契約の箱を担いだ祭司たちは、民の先頭に立ち、¹⁵ヨルダン川に達した。春の刈り入れの時期で、ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていたが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、¹⁶川上から流れてくる水は、はるか遠くのツァレタンの隣町アダムで壁のように立った。そのため、アラバの海すなわち塩の海に流れ込む水は全く断たれ、民はエリコに向かって渡る事ができた。¹⁷主の契約の箱を担いだ祭司たちがヨルダン川の真ん中の干上がった川床に立ち止まっているうちに、全イスラエルは干上がった川床を渡り、民はすべてヨルダン川を渡り終わった。

【使徒書日課】使徒言行録 10章34～48節

³⁴そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。³⁵どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。³⁶神がイエス・キリストによつ

て—この方こそ、すべての人の主です—平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、³⁷あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。³⁸つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。³⁹わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、⁴⁰神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。⁴¹しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。⁴²そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。⁴³また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

⁴⁴ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。⁴⁵割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。⁴⁶異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、⁴⁷「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。⁴⁸そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。

【福音書日課】ルカによる福音書 3章15～22節

¹⁵民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。¹⁶そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。¹⁷そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、穀を消えることのない火で焼き払われる。」¹⁸ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。¹⁹ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、²⁰ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

²¹民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、²²聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨシュア記 3章1～17節

¹ヨシュアは朝早く起き、イスラエルの人々すべてと共にシティムを出発し、ヨルダン川に着いた。彼らは川を渡る前に、そこで夜を過ごした。²三日たってから、民の役人は宿営の中を巡り、³民にこう命じた。「あなたがたの神、主の契約の箱と、それを担いだレビ人である祭司たちがあなたがたの目に入ったら、おのおのの場所から出発し、その後には続きなさい。⁴ただし、箱との間には二千アンマほどの距離をとり、それ以上近づいてはならない。あなたがたの進むべき道を知るためである。あなたがたは、今まで一度も通ったことがないからだ。」⁵ヨシュアは民に言った。「あなたがたは身を清めなさい。主が明日、あなたがたの中で驚くべき業を行われるからだ。」⁶ヨシュアが祭司たちに言った。「契約の箱を担ぎ上げ、民の先頭に立って川を渡りなさい。」彼らは契約の箱を担ぎ上げ、民の先頭に立って進んだ。

⁷主はヨシュアに言われた。「今日、イスラエルのすべての人々の目の前で、あなたを大いなる者とする。私がモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、彼らを知るためである。⁸今、契約の箱を担ぐ祭司たちに、『ヨルダン川の水辺に着いたら、ヨルダン川の中に立ち止まれ』と命じなさい。」⁹ヨシュアはイスラエルの人々に「ここに近づいて、あなたがたの神、主の言葉を聞きなさい」と命じ、¹⁰こう言った。「生ける神があなたがたの中におられ、カナン人、ヘト人、ヒビ人、ペリジ人、ギルガシ人、アモリ人、エブス人をあなたがたの前から必ず追い払ってくださることは、次のことによって知るだろう。¹¹全地の主の契約の箱が、あなたがたの先頭に立ってヨルダン川を渡って行く。¹²そこで今、あなたがたはイスラエルの諸部族から、部族ごとに一人ずつ、十二人を選び出しなさい。¹³全地の主である主の箱を担いだ祭司たちの足の裏がヨルダン川の水につかるや、上流から流れて来る水がせき止められ、一つの堰ができるだろう。」

¹⁴民はヨルダン川を渡るために天幕を出発した。契約の箱を担いだ祭司たちが民の先頭に立った。¹⁵ヨルダン川は刈り入れの期節の間中、水が岸まで満ちていた。ところが、箱を担いだ祭司たちの足が水につかるや、¹⁶上流から流れてくる水が、遠く離れたツアレタンのそばにある町アダムのところでどまり、一つの堰となった。アラバの海すなわち塩の海へ流れて行く水は完全にせき止められた。民はこうして川を渡り、エリコに向かった。¹⁷主の契約の箱を担いだ祭司たちが、干上がったヨルダン川の真ん中に立ち続けている間、イスラエルのすべての人々は干上がったところを渡り、ついにすべての民がヨルダン川を渡り終えた。

使徒言行録 10章34～48節

³⁴そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。³⁵どの民族の人であっても、神を畏れて正しいことを行う人は、

神に受け入れられるのです。³⁶神がイエス・キリストを通して御言葉をイスラエルの子らに送り、平和を告げ知らせてくださいました。このイエス・キリストこそ、すべての人の主です。³⁷あなたがたは、ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始めてユダヤ全土に起きた出来事をご存じでしょう。³⁸つまり、ナザレのイエスのことです。神は、この方に聖霊と力を注がれました。イエスは、方々を巡り歩いて善い行いをなし、悪魔に苦しめられている人々をすべて癒されたのです。それは、神が共におられたからです。³⁹私たちは、イエスがユダヤの地方とエルサレムでなされたことすべての証人です。人々はイエスを木に掛けて殺してしまいましたが、⁴⁰神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。⁴¹しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活された後、食事を共にした私たちに対してです。⁴²そしてイエスは、ご自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、私たちに命じになりました。⁴³イエスについては、預言者も皆、この方を信じる者は誰でもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

⁴⁴ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。⁴⁵割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。⁴⁶異邦人が異言を語り、神を賛美しているのを聞いたからである。そこで、ペトロは、⁴⁷「この人たちが水で洗礼を受けるのを、誰が妨げることができますか。私たちと同様に聖霊を受けたのです」と言った。⁴⁸そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けさせた。その後、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在してくれるようにと願った。

ルカによる福音書 3章15～22節

¹⁵民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。¹⁶ヨハネは皆に向かって言った。「私はあなたがたに水で洗礼を授けているが、私よりも力のある方が来られる。私は、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになる。¹⁷その手には箕がある。そして、麦打ち場を掃き清め、麦は倉に納めて、殻を消えない火で焼き尽くされる。」¹⁸ヨハネは、ほかにもさまざまの勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。¹⁹しかし、領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、²⁰ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、さらに悪事を重ねることとなった。

²¹さて、民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、²²聖霊が鳩のような姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」という声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月8日「公現後第1主日」の日課主題は「イエスの洗礼」。「降誕祭」の終わりを告げる「公現日(栄光祭／顕現祭)」(1月6日)は、元来、東方系教会で「降誕」の祝祭に相当するものとして祝われていた記念日を、西方系教会の「降誕日」(12月25日)と両立させる形で取り入れられたため、東方系(ギリシア正教会系)と西方系(ローマ・カトリック～プロテスタント系)でその位置づけに違いがある。西方系教会では、伝統的に、「公現日」に「東方の学者らの来訪と礼拝」を記念してきたが、東方系教会では、「主の洗礼」を記念する。西方系教会で「主の洗礼」の記念は、「公現日」の記念を終えた後の主日に設定されてきた。ただし、西方系教会でも「主の洗礼」は「公現」の一形態とみなしており、「降誕祭」の終わりを「公現日」当日ではなく「主の洗礼の主日」にあると説明される場合がある。

・旧約聖書日課は、「ヨシュア記」から、ヨシュアに導かれたイスラエルの民が東方の荒れ野からヨルダン川を渡ってカナンに足を踏み入れる場面を物語る箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、百人隊長コルネリウスとその家族が信仰に入った経緯をペトロが教会の人々に説明し洗礼を受ける場面を物語る箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、洗礼者ヨハネについての人々の評判を伝えた上で主イエスの洗礼の出来事を伝える箇所。

旧約日課(ヨシュア3章より)

・「ヨシュア記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第一に置かれた文書。「前の預言者」は、「ヨシュア記」から「列王記」までの四文書のまとまりで、「イスラエルのカナン定住時代」を描く「イスラエル正史物語」として構成されている。「ヨシュア記」は、ヨシュアの指導の下でカナン入植・定住を果たすまでを物語る。ヨシュアは、本書(1章)および「申命記」(31章)でモーセの後継者として位置づけられているが、「律法(五書)」で物語られる「モーセ物語」の早い段階から登場し、モーセの「従者」として描かれている(出エジプト17章、24章、32章、民数記11章、13章など)。ヨシュアは、出エジプト一年目に「約束の地」への侵入を図ろうとした際の先遣隊(斥候)12人の一人であるが、この12人の内、その後の40年の荒れ野生活を経て約束の地への侵入を果たした際に残ったのは、ヨシュアともう一人「カレブ」のみとされている(民14:38)。ヨシュアは「エフライム族」出身、カレブは「ユダ族」出身とされており(民13:6,8)、それぞれカナン定住時代の北部および南部の盟主となった部族とみなせる。

・日課箇所は、ヨシュアの率いる民が「契約の箱」を担ぐ祭司ら先頭にしてヨルダン川を渡る場面として描かれているが、これに先立ってすでに、斥候二人がエリコの偵察のために派遣されている(ヨシュア2章)。エリコは、紀元前8000年期には集落として成立して

いたとされる古代都市で、ヨルダン川の西側、海拔マイナス250メートルの峡谷地に位置する。

・日課箇所の描く「ヨルダン渡河」の逸話は、「モーセ物語」中の「出エジプト伝承」における「葦の海の渡海」の逸話とセットで理解されてきた。すなわち、「モーセ物語」中の「渡海」の出来事が「ヨシュア物語」中の「渡河」の出来事によって追体験的に想起・再現されることで、「モーセ物語」の核心である「契約の箱に象徴される神の契約としての主の言葉＝律法に傾聴・信従する民イスラエル」というイスラエルの自己理解が、「ヨシュア物語」でも継続して有効なものとして再確認されるのである。こうして、この「律法の民」というイスラエルの自己理解が世代を超えて継承されるべきものとして提示されるのである。

・「ヨシュア記」では、ヨシュアが民を結集させる場所として、「エバル山」と「ゲリジム山」に挟まれた地「シケム」を特別視している(8:30以下、24章)。一方、「契約の箱」は、「シケム」ではなく「シロ」に幕屋を建設して安置したこととなっている(18:1)。「シケム」の逸話は全部族を対象とした出来事として物語られている一方、「シロ」に関しては七部族の問題が付随して記されている(18～19章)。すなわち、「シケム」がイスラエル(あるいは、北方諸部族)全体の一致に関わる伝承地であるのに対して、「シロ」は七部族のみに関わる伝承地であるという推測が成り立つ。「シロ」に安置された「契約の箱」は、サムエルの時代を経てユダ族・ダビデの手に渡り、最終的にソロモン王の建設したエルサレム神殿に安置されたことになっている。

使徒書日課(使徒10章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」で、「使徒たちを中心としたエルサレムの教会共同体」から始まった信仰運動が地中海各地のディアスポラ系ユダヤ人の間に広まり、各地に教会共同体が成立する中、途中から独自の方向性を強めたパウロ系の教会共同体が最終的に「エルサレム」を母体と認知する使徒らの系譜に属する教会共同体の流れと調和した立場を取るようになったことを軸に物語られている。「ルカ文書」(ルカ福音書および使徒言行録)は、おそらく、パウロに近い立場にある者(ルカ?)が、パウロの取った調停的立場を擁護するために他の福音書(マタイやマルコ)を参考にして著したものと考えられる。

・日課箇所は、使徒ペトロがユダヤ・サマリア地方の伝道にとどまっていた段階で、港町ヤッファに滞在中に幻を示されて、異邦人である百人隊長コルネリウスを信者として教会共同体に受け入れ、洗礼を受けることになった経緯を伝える物語の終わり部分である。続く章では、ペトロがエルサレムの教会共同体の前でこの経緯を弁明し、承認を得たとの逸話が記されている。「使徒言行録」は、パウロの異邦人伝道を多く取り上げるが、このコルネリウスの逸話と、8章のエチオピアの宦官の逸話を先行する出来事として置いている。

・コルネリウスの逸話でも、8章のエチオピアの宦官の逸話でも、問題の焦点として、「異邦人である者が洗礼を受けるのに、何か妨げがあるか」という問いが共通して示されている(8:36、10:47)。「使徒言行録」において、「洗礼」は、当初、ユダヤ人である者が「悔い改めと罪の赦しのしるしとしてのキリスト」に従い「聖霊を受けた者として新しい共同体に加わる」こととして描かれていた(2:37以下)。すなわち、「割礼を受け、律法遵守の生活を送る」者であることは前提であり、あらためて問われることはなかった。異邦人の「洗礼」問題は、「割礼を受けておらず、律法遵守の生活を送っていない」ということが「悔い改めと罪の赦しのしるしとしてのキリストに従い、洗礼を受けて、聖霊を受けた者の新しい共同体に加わる」上で妨げになるのか、という点にあった。そして、異邦人が洗礼を受けたという二つの逸話は、「妨げではない」という立場をペテロら使徒たちが取ったことを示すものなのである。

福音書日課(ルカ3章より)

・日課箇所には、洗礼者ヨハネの評判と投獄について概述したことに続いて、彼から主イエスが洗礼を受けられたことを伝える逸話が短く記されている。主イエスの洗礼の逸話は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えており、ヨハネ福音書も示唆している。ルカは、マルコに倣って、マルコよりも簡潔に、聖霊降臨と天からの「神の子」宣言も含めて事実だけを簡潔に伝えている。

・洗礼者ヨハネの洗礼は、「悔い改めのしるしとしての洗礼」と理解されていたと考えられる。主イエスの弟子たちは、基本的にはこの洗礼者ヨハネの洗礼理解を継承していたと考えられるが、主イエスにおいて起こったとされる出来事を想起・再現するものとして、「主イエスの名による洗礼」という形式を取ったと考えられる。共観福音書は、そこで想起・再現される出来事として「主イエスの洗礼」そのものを想定し、そのときに起こった「聖霊降臨」と「天からの神の子宣言」をイエスの名による洗礼を受けた信者に付与される(教会が付与する!)ものとして示した。一方、「パウロ書簡」では、「主イエスの死と復活」の出来事が洗礼によって想起・再現されるものとして示されている(ローマ 6:3以下など)。このように信徒すべき方の身に起こった出来事を想起・再現するものとして入信儀礼を位置づけることは、古代密儀宗教で広く行われていた。弟子たちのおこなった「洗礼」に密儀性(秘儀性)があったかどうかはわからないが、その密儀宗教との類比的性によって「洗礼」が地中海世界に広がった諸教会共同体で広汎に受け入れられたと言うことはできよう。

・主イエスの洗礼にまつわる出来事は、主イエスの主体的な決断などではなく、ただ受動的な「恵み」の出来事として描かれている。洗礼は、教会において「恵みのしるし」として位置づけられ、当人の意志以上に、教会共同体の意志と責任が強調されてきた。

来週の誕生日(1月1日~7日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-357 番「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22歳で早世した18-19世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讃美歌集(1784年版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讃美歌。
- ・21-55 番「人となりたる神のことば」(= I 190「あめよりくだり人となりし」)。作詞のウィリアム・W・ハウは19世紀の著名な讃美歌作家で、英国教会の主教職の傍ら60曲以上の讃美歌を作曲発表している(21-379番など)。曲は、作曲者不詳だが17世紀末の讃美歌集から知られ、メンデルスゾーンのアラトリオ「エリヤ」の合唱にも用いられている。
- ・21-543 番「キリストの前に」(歌詞= I 537「わが主のみまえに」)は、1881年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495番)の曲、1903年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.
2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.

21-55「人となりたる神のことば」

O Word of God Incarnate

1. O Word of God incarnate, / O Wisdom from on high, / O Truth unchanged, unchanging, / O Light of our dark sky: / we praise you for the radiance / that from the Scripture's page, / a lantern to our footsteps, / shines on from age to age.
2. The church from you, dear Master, / received the gift divine; / and still that light is lifted / o'er all the earth to shine. / It is the chart and compass / that all life's voyage through, / mid mists and rocks and quicksands, / still guides, O Christ, to you.
3. O make your church, dear Savior, / a lamp of burnished gold / to bear before the nations / your true light as of old. / O teach your wandering pilgrims / by this our path to trace / till, clouds and darkness ended, / we see you face to face.